

「できない」ってすごいんだ

浜松市立芳川小学校 三年 齋藤 寛太

この本を最後まで読んだら、ようやく主人公「ひろくん」の正体分かった。ひろくんは、どういう子だと思いますか。答えは「動けない子」だ。それが分かったぼくは、「動けないってどんなかんじかなあ。」と思った。もちろんびっくりもした。

じつはぼくにもちよつとみんなとちがうところがある。ぼくはふつうの人と色の見え方がうんだ。たとえば、ぼくの三十色クーパーペンシルの「きみどり」と「やまぶきいろ」は、ぼくにはほとんど同じに見える。だから他のみんなの色の見え方がよく分からない。

この本にはひろくんの他にも、目が見えない「まりちゃん」、耳が聞こえない「さのくん」、両親がいない「きみちゃん」も出てくる。ひろくんは、見えない・聞こえないってすごいんだね、と毎回言っている。その後に、見える・聞こえるってそんだね、とも言っている。本当にそうなのかなあ。

ぼくは、色が分かるっていいなあと思う。だって色が分かれば、ぼくの大すきな虫の色をぬるときに手伝ってもらわなくてもすむし、番号もすぐに分かるよね。だからひろくんみたいな考え方を知って、すごくおどろいた。ぼくは、色が分からないのはおじいちゃんといっしょだとお母さんから教えてもらったので、そんなには気にしていないけどね。

「きみちゃん」は、大地しんでお父さんもお母さんもしんできて、いないんだ。ひろくんは、いっしょけんめい考えたけど、それがどんなかんじか分からなかった。ぼくも考えてみたけど、やっぱり

分からない。だけど、きみちゃんは、あんまりさびしくないとっていたので、ちよつとびっくりした。

この本には、「できないこと」や「ないもの」がある子たちがでてくる。ひろくんはいつもそれが「どんなかんじかなあ」と考えている。ひろくんも動けないけど、そのぶんいろんなことを頭を使って考えている。宇宙のこと、分子のこと、古代のことを考えている。すごいなあ。

ぼくが動けなかったらどんなかんじかなあ。お父さんと二人でやってみた。たった三分間という短い時間だったけど、じつとしていたらとても長くかんじた。ぼくは何も考えることができなかった。体を動かすのがすきなぼくにはとてもむずかしかった。動けないってすごいなあと思った。きみちゃんはこれを一日やってみていつもの百倍くらい考えた、と言っていたから、きみちゃんもすごい子だ。

ぼくはこの本が大すきだから、五回以上読んだ。読むたびに少しずつ考えることが多くなった。ぼくが思ったのは、もしぼくの周りに「できない」人がいたら、その人の気もちを「どんなかんじかなあ」とそうぞうしてみようということ。きつとどの人にも「すごい」ことがあるような気がする。ぼくだってちよつとびりだけど色が分からなくて「すごい」のかもしれないぞ。

書名 どんなかんじかなあ
著者名 中山 千夏
発行所 自由国民社